

人生の再出発

東洋大学大学院社会学研究科社会心理学専攻 博士前期課程

陸 英善 (りく よんそん)

私は1998年に初めて日本に来ました。それが私の人生の交差点ではないかと思えます。

日本に留学することを決めたのは、韓国に留学していた日本人と出会って友だちになったことがきっかけです。日本語は韓国にいても学習することができますが、日本語を日本人と会話するための道具として使うだけではなく、それを生かして、自分の興味や関心をもっている分野について勉強しようという気持ちになったのです。そして、日本語を勉強することで視野を広げることができれば留学の半分は成功だと思いました。

しかし、日本の文化や習慣などをまったく知らずに日本に来たため、最初の1年ほどはことばもうまく話せませんでした。また、文化の違いにとまどい、韓国での生活から日本での生活への変化に適応する難しさなどから、生活は辛いものでした。それから、2年後、日本語がかなり話せるようになると、日本の文化や習慣など異文化生活にもある程度慣れてきました。

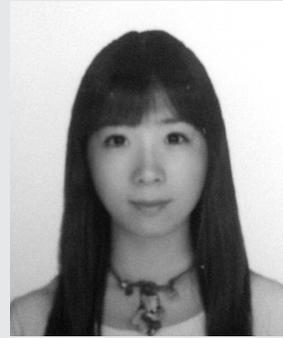
日本に留学してから、ある意味で距離をおいて、自分の国を客観的に見るようになりました。韓日関係は個人間にとっても国家間にとってもものすごく敏感な問題です。そのため、テレビや新聞などで韓日関係に関する報道に接すると、いつも緊張を感じてしまいます。とくに獨島(竹島)をめぐるの両国の意見は対立が極まっています。同じ出来事であっても、互いの表現の方法によって論争が起

こっているのをよく目にしています。個人的には、こういうことが両国の関係や国交に影響を与えるのではないかと心配になっています。

日本での生活を通じて、日本のことをできるだけたくさん知り、理解を深めることが大切だと考えるようになりました。その上で心理学的に両文化の比較研究をしなければ、互いに相手を一方的に批判するのではなく、少し離れて両国を見るいい機会となるのではないかと思ったのです。そうしてこそ、相互理解が深まって友好的な韓日関係につながるのではないかと思いました。

そして、心理学を専攻するようになりました。現在、明海大学を卒業して、東洋大学の大学院生になり社会心理学を専攻しています。先生のすばらしいご指導のおかげで、研究方法や、心理学について勉強すべきことを学んでいます。自分の研究としては、感情抑制の問題に関心を持ち、日韓比較研究をしてきました。去年、社会心理学会の大会で発表した研究では、悲しみの抑制については韓日で少し差がありましたが、怒りの抑制については日本人でも韓国人でもほとんど同じでした。外国に来ると自分の国と異なっている点を強く感じるものですが、国や文化が違っても人間の心には共通点がきわめて多いということをおぼることができました。

私の指導教授は安藤先生と堀毛先生のお二人で、授業やミーティングを通じて、研究の全側面にわ



Profile — 陸 英善

1998年に日本に留学後、2012年に明海大学外国語学部を卒業。同年に東洋大学大学院社会学研究科博士前期課程に入学。専攻は社会心理学。卒業論文は「感情抑制スキルに関する日韓比較研究」。

たって丁寧に指導していただいています。とくに、論文の書き方と学会の発表に関しては、徹底的に指導を受けました。初めての学会発表論文集の原稿は、二人の先生のコメントをもとに何度も改稿を重ねました。なかなかOKが出ないことにいらしたこともありましたが、明快で完成度が高い論文作成のノウハウを教えてくださいました。

私ひとりでは留学生生活をうまく進めていくことは難しいですが、すばらしい先生達とたくさんの仲間がいます。隣で支えてくれる皆さんにはとても感謝しています。そして、これから先に向かって研究の道を歩き続けたいと思います。

大学院レベルでの留学は、何かと苦勞も多いですが、はっきりした目的意識と研究に対する強い意識があれば、その成果も大きいと思います。留学生として日本に来ている方、そして、海外への留学を考えている方はぜひとも頑張ってください。